

本興寺だより

令和二年 十一月
第二一五号

「人の寿命は無常なり。・・・風の前の露、尚譬えに
あらず。賢きも、儂きも老いたるも、若きも定めなき
習いなり。さればまず臨終の事を習うて後に他事を習
うべし」
(宗祖 妙法尼御前御返事)

十一月七日は立冬。秋の涼しさから冬の寒さへ
向かう分岐点です。人生にも春夏秋冬の四季があ
ります。暖かさも暑さも涼しさも寒さも色々体験
します。

ところで人は何歳まで生きたいと思っ
ていらっしゃるか？日本人の平均寿命は男性八十一・四
一歳、世界で三位。女性八十七・四五歳、世界で二位
の長寿国です。

人は最低でも平均寿命は生きられる（生きたい）と
思っています。しかしそれ以上生きる人は半分なので
す。望む寿命まで生きられる人は一握りなのです。命
は無常で儂いとは言葉で知っていても、それは他人の
死であり、己は何時まで死なないと思っ
ているのが我々であると云われます。



一つの例外もなく必ず死ぬという事実から目を背
けるなと云われます。

人の命は強い反面、いとも簡単に死ぬことを、実感
として理解した時に、一瞬一瞬を大切に生きなければ
ならないことが納得でき、他人の命を脅かすことも、
名誉や財産への過度の執着もなくなるのです。

命とはどういうものか？全ての命は大地の恵み（エ
ネルギー）を受けて現れてくるのです。人の肉体も然

りです。命を繋ぐ食べ物、野菜、果物、動物、皆大
地から育ったものです。

法華経には仏様が教えを説かれた時、地の下より無
数の菩薩が湧き出て来られたとありますが、そのこと
も象徴しているのです。また大地から芽吹いた命は、
天からの恵み（エネルギー）によって育まれ成長しま
す。太陽の光、雨、雪、風など・・・。

また法華経には万物共生の広大な大地が、等しく慈
しみの雨に潤い、大小様々な草木の命が生き生きと躍
動することが示されています。

従つて人の命も、魂魄（こんぱくたましい）は、
臨終になれば、天から与えられた精神に宿る気（魂
たましい）は天へと帰り、地から与えられた肉体
に宿る気（魄たましい）は大地へと、恵みを受け
た天地へ帰っていくのです。

「無常」とは、人の命を含めて、この世の一切のも
のは常に生滅流転し永遠に不変のものはないという
ことです。しかし姿形は変化しても無くなるわけでは
なく、その底流に続く命（魂）があるということをお説
いています。

仏様が諸行は無常であると云われたのは、私達があ
まりに目先の事、生き方に捉われ過ぎるため、「人は
何時かは必ず消えて亡くなるのだよ」と、我欲に執著
し過ぎて魂の本願を忘れないように説かれたのです。

人の一生は生老病死を経て終わります。草木や樹木

たとえ何時か来る自身の死を認めても、それまでは
何時も健康で、年齢を経ても老いず若さを保ち、病に
罹らず、長命を全うして、ある日突然コロッと・・・が
良いと考える人が多いのです。

しかしそういう人は少ないのです。わかっているなが
ら人はそれにこだわります。寿命を全うしたのかは、
仏様しかわかりません。人は死について真剣に考えず
語りたがらないと云われます。心のどこかで死は不幸
なこと、不自然なこと、縁起の悪いこと、

あつてはならないことと思ひ込んでいます。

仏様は何時でも死を觀察しなさいと説か
れています。人は自分以上に大切なものは
ないという概念は誰にもあります。その自
分に死があるということは避けたいし、認
めたくないかもしれませんが、命あるもの

は一つの例外もなく必ず死ぬという事実から目を背
けるなと云われます。

人の命は強い反面、いとも簡単に死ぬことを、実感
として理解した時に、一瞬一瞬を大切に生きなければ
ならないことが納得でき、他人の命を脅かすことも、
名誉や財産への過度の執着もなくなるのです。

命とはどういうものか？全ての命は大地の恵み（エ
ネルギー）を受けて現れてくるのです。人の肉体も然

の命も同じです。花を咲かせ、実が成り、枯れていき
ます。生老病死は人生の四つの苦と人は感じますが、
命そのものに備わっている無常の姿の一つなのです。

長く生きれば、命の衰えと共に必ず老いと病が出て
きます。避けて通れないのです。老と病を経ず死に至
れば、それは往々にして短命であったり事故であつた
りして未練が残るのです。

老いと病気は命の側面だと思えば、それを患って辛
い時でも、現状を素直に受け入れてから、回復への意
欲と希望を持って生きることが大事だとい
うことです。



「臨終を習う」とは、光は闇の中に射して
その明るさが引き立つように、人生の最期
に訪れる死を学ぶことにより、生きる重み
と生き方を問い直すことでもあります。

また他人との出会いと別れの意義を見つめ、心の癒
しと命の尊さに気付きなさいと云われています。

私達は何時か己の死をまじかに自覚する時、それま
での人生に心の安らぎが得られるような生き方をし
たいものです。自他共にかけてがえのない命ならばこそ、
他の人と助け合い支え合う中で、心の調和と安らぎが
得られるのです。

家族でも親族に対しても、人間関係が不調和のまま
死を迎えてはいけないのだと云われています。合掌